３・１１ 東日本大震災手記

(昭和 59 年Ⅱ部電気工学科卒) 佐藤　裕

２０１１年３月１１日（金）１４時４６分、東北地方太平洋沖地震が発生。
それに伴い発生した未曾有の大津波により、全国で死者・行方不明者合わせて 20000 人を超える大規模地震災害となり、「東日本大震災」として歴史に名を刻む事となった。
私が住む岩手県釜石市では震度６弱を記録したが、地震による被害はさほど大きくなく、大津波によって多くの尊い命、家屋や自動車等の財産そして働く場が失われてしまった。
私は北海道出身であるが、釜石での生活が２５年になり、現在新日本製鉄㈱釜石製鉄所に勤務している。 地震発生時は職場でデスクワークをしていた。 突然の大きな揺れで、事務所内にいた約６０名の社員は全員立ちすくみ、長く続く大きな揺れに各自ヘルメットを被り机の下にもぐり込んだ。 地震は何度も経験してきたが、危険を感じ机の下に身を潜めたのは４０年以上も前の十勝沖地震以来であった。 市内の防災放送によって大津波警報が発令された事を知り警戒していたところ、地震から３５分後に事務所の前を通る国道２８３号線上を釜石駅方面から津波が押し寄せてきた。 事務所の３階にいて、いち早くその様子に気づいた社員が、既に渋滞で動けないでいる車両のドライバー達に「津波が来たぞー！ 早く逃げろー！」と大声で叫んでいた。 海岸から１．２ｋｍも離れており、海の様子が見えないドライバー達は、まさかこんな所まで津波が来るはずがないと思っているので半信半疑で車の周辺をウロウロしていた。 道路の向こうから迫り来る黒い波を自分の目で確認して、あわてて近くの建物に避難した。 道路上に残された車は浮き上がり、配線がショートしたのかクラクションが鳴り止まない。 津波は製鉄所正門の少し手前まで来たが、製鉄所の敷地は道路から２メートルほど高くなっており、正門近くに建っている事務所の浸水は免れた。 その後車内に残され海水に浸かっていたドライバーを発見し、従業員達が国道と製鉄所構内の間にある金網フェンスを蹴破り、何人も助け上げた。事務所よりも海側に建っている当所の火力発電所周辺には海水が流入し、車両や瓦礫等が構内に流されてきた。
製鉄所内ではすぐに出勤者の安否確認を開始した。 その後帰宅可能な者は帰宅し、帰宅困難者や出張者、そして構内に避難してきた一般市民の計１００名程度が製鉄所内で一夜を過ごし、備蓄していた水や非常食が大いに役立った。
電源は全て落ちていたが（東北のほぼ全域が停電していた)、震災発生がまだ明るい時間帯であったのが不幸中の幸いであった。 これが夜の出来事であれば、真っ暗闇の中で状況すらわからず、なす術もなく死者数はもっと増えていたであろう。 経験上、地震等で停電が発生した直後は、安全と避難のための「照明」と「通信手段」の確保が必須と考えていたが、通信については今回ＮＴＴの電話局そのものが津波で被災したため、電話やインターネット等の通信手段が不通となった。 携帯電話もすぐに不通となり、社員の安否確認に手間取り、また家族間で連絡をとる手段も無くなってしまった。
その後数日間、盛岡のラジオ局から沿岸地区へ向けた呼びかけや安否確認を問う放送がしばらく続いたが、こちらから状況を知らせる術が無かった。 内陸部への道路が通れるようになって、車で行けた人達が個々人の安否情報等をラジオ局へ持ち込み、沿岸部の状況が少しずつ具体的にわかってきたようである。 津波被害を受けなかった地域の電源や通信が復旧したのは、約１週間後であった。

私は震災当日の夜に、自宅へ一時帰宅した。
自宅は海岸から７ｋｍ内陸側にあり、幸い自宅にいた妻や愛犬は無事で、家自体も大きな損傷はなかった。　帰宅してみると、自宅周辺の住民が外へ避難していて一箇所に集まっていた。　まだ余震が続いており、皆不安気な様子で寒い夜を過ごしていた。　地震発生時、妻は愛犬を抱きかかえて靴を履く余裕もなく、裸足で外へ飛び出したそうである。　妻が言うには、「家の床にはガラスの破片が散乱しており、真っ暗なのでケガをする危険がある。　大きな余震で家具等の下敷きになるのが怖い。」と言う。　なるほどその通りである。　結果その日は、車の中で一夜を過ごす事となった。

翌日土曜日は避難所（小学校体育館）で一夜を明かした友人（奥さん）が、疲れ果てた様子で我が家へやって来た。　職場からの避難中、車のルームミラーで後方から来る津波を見てあわてて車を乗り捨て、近くにあったガスタンクによじ登り一命をとりとめたとの事である。　緊張から解放され安心したのか、涙を流しながら語ってくれた。　自宅へ帰る道路が寸断され、車も流されてしまったので我が家に泊ってもらう事にした。　しばらくご主人と連絡がとれなかったが、各地の避難所に自分の居場所を書いた紙を一緒に貼って回り、後日無事に再会する事ができた。　一方ご主人は、遺体がまだ町のあちこちにある状況の中で、瓦礫の中に奥さんの姿や乗っていた車を探し続けたらしい。　彼らの自宅は海岸から２ｋｍ離れていたが、１階の天井まで海水に浸かり、家の中は泥や瓦礫で埋まっていた。　飼っていた愛犬は、残念ながら犬小屋の中で息を引き取っていたそうだ。　その後２週間ほど、我々４人はローソクの火の中で生活を共にした。

三陸沿岸地域はかつて何度も津波の被害にあってきた事から、津波に対する防災意識が非常に高い。　沿岸の町や集落には大きな防波堤や防潮堤が必ずといってよいほど築かれており、沿岸近くの国道を走っていても大きな防潮堤が邪魔をして、美しい海が見られない箇所が多い。　にもかかわらず、今回の大津波には勝てなかった。　後日、一瞬にして無くなってしまった近隣の町を高台から眺めると、人間の無力さを感じた。　ただ呆然と立ち尽くすだけで、何か夢の世界を見ているようで、現実として受け入れられない光景がそこにあった。

釜石の町は国家プロジェクトで築いた湾口防波堤が２年前に完成していたおかげで、そこでエネルギーが減じられ、津波の遡上高さが半減したらしい。　その結果、繁華街全体が津波で覆われたものの、建物はその位置に残ったものが多い。　震災３日後、釜石の繁華街を歩いてみた。　既に自衛隊が入り生存者の捜索や道路を確保するための瓦礫処理が行われていた。　商店街の１階はどこも大量の瓦礫が流れ込み、車は津波の中で洗濯機状態となったのか、その多くがぺちゃんこに潰されている。　１階が波でさらわれ、２階部分が１階になってしまった家もあった。　電柱の鉄筋や大型トレーラーまでもぐんにゃり。１万トンの大型貨物船が地上にある。　本当に凄まじい破壊力である。　バスに取り残された乗客が亡くなった。　趣味を通じて知り合った食堂の店主も亡くなってしまった。釜石市だけで、死者・行方不明者合わせて１３００人超、全半壊家屋数が３７００戸という状況である。

震災直後の町は、車の往来が無く静まりかえっていた。　その静寂した瓦礫の街を人々がリュックを背負い、うつむきながら無言で歩く姿は、テレビや写真で見た終戦直後の日本の風景そのものと感じた。　まるで映画のワンシーンの中に自分がいるかのような錯覚に陥った。
瓦礫の中の家屋や車には捜索した事を示す〇や×印が赤ペンキで大きく描かれていた。

捜索した外国救援隊を表すサインもあった。　現在は、残った建物ごとに赤い旗や黄色い旗が、風に寂しくなびいている。　これは所有者の意思表示であり、撤去希望が赤、建物は残して瓦礫のみ撤去希望が黄色といった具合である。

　隣の大槌町や陸前高田市にも友人や知人がおり、その後多くの避難所を探し訪ねてみた。これらの町は、ほとんどの家屋が破壊され瓦礫となって流され、町全体が更地化してしまった。　釜石の町とは様相が異なる。　特に大槌町は火災が町のあちこちで発生したため、残った建物が黒こげており、一面焼け野原といった状態である。　今まで見えなかった海岸が見通せるようになり、実は海が近くにあって土地の高さも海岸レベルであった事がよく分かる。　ようやく再会できた大槌町に住む友人は、自宅から避難しようとしたところで津波に襲われた。　２階へ上がり飼い犬を片手に抱いて自宅の屋根に脱出し、屋根ごと流されたらしい。　周りはまさに火の海で、もの凄く熱かったとの事。　一足先に逃げて歩道橋の上からその様子を偶然見ていた奥さんが、これがお父さんの最期の姿と覚悟したそうである。　奥さんも既に胸の高さまで海水がきていたとの事。　友人は流されながら別の家に入り込んだものの、海水がどんどん上昇してきて、空いている片手で天井の板をたたき割り、その隙間に顔を入れて何とか呼吸したそうである。　その後波が少し引いたのを見計らって別の屋根に乗り移り流されていたところを、消防団の人が山の斜面から梯子を渡してくれて、愛犬共々助けられたという話である。

　震災から３ヶ月が経過した現在、皆の気持ちが一歩前へ進み始めたと感じている。
どこかで気持ちを整理し、前を向かねばならない時が来る。　これまでは自分達の力では何もできなかったが、多くの人達に支えられて各々がようやくスタートラインに立ち始めた。

　これまで全国の皆様からいただいた被災地域への厚いご支援に対して、深く感謝申し上げたい。　我々が直接知り得ない、有形無形の温かいご支援が数多く寄せられていると聞いている。　市内では各地の自衛隊車両や道警、大阪府警のパトカーが走り、長野や群馬、兵庫県警の警察官が交通整理にあたってくれている。　また北九州市や東海市からの行政応援派遣や日本赤十字社の救護テント等、本当に全国の人達に支えられている事を実感する。

私の勤務先である釜石製鉄所は、港にある専用桟橋や荷役設備等が大きな被災を受け、現在復旧工事中であるが、県の公共埠頭を使用しながら震災１ヶ月後から操業を再開した。こうした我々の生産活動を通して元気な姿を見ていただくのも、地域の人達の励みにつながるものと思っている。

これからは、惨状を目の当たりにした子供達をはじめ、大きな痛手を負った多くの人達に、美しい故郷と希望を取り戻してあげたい。

大きな被災を免れた我々が中心となって、町が変わりゆく姿を見せられるよう頑張りたい。それが全国の皆さんへの恩返しにもつながるものと信じている。

戦後日本を立て直してきた当時に比べ、現代社会には数段進歩した文明の利器や知恵がある。　我々はきっと成し遂げられるはずである。　成し遂げなければならない。

皆様には、どうかこの地を引き続き温かく見守っていただきたいと思います。